

第2回 食の循環によるまちづくり推進委員会 議事録

日時：平成22年8月10日（火） 午後6時45分から午後9時

会場：新発田市生涯学習センター 多目的ホール

参集者：〔委員〕

下條荘市委員長、清野千香子副委員長、渡辺栄子委員、西鉄幹委員、木戸寿明委員、佐藤ミネ委員、高山廣伸委員、中野藤彰委員、出村満委員、林洋子委員、中野柳委員、相馬重輔委員、伊藤ひろみ委員、佐藤恭子委員、渡辺兼一委員、津村賢委員、小林豊男委員、星野龍一委員、鈴木裕子委員、増子農政企画係長（菅委員代理）、市野瀬節子委員、宮崎光夫委員、茂野栄委員、原觀光振興課参事（大竹委員代理）

〔事務局〕

塚野総合政策部長

食の循環によるまちづくり推進室（櫻井参事、下妻副参事、吉田主任）

1 開 会

【事務局】

第2回食の循環によるまちづくり推進委員会を開催いたします。

開会あいさつを含めまして、以降議事進行を委員長にお願いいたします。

【委員長】

委員の皆様には一日のお仕事お疲れのところ、第2回委員会にお集まりいただきありがとうございます。早速ではありますが、時間の関係もありますことから、本日の議事につきましては、お手元の次第に基づき始めさせていただきます。

2 議 事

【委員長】

食の循環大使の名称について、皆さんからご意見いただきたい。

委員の皆様から（仮称）食の循環大使の名称について、27候補をいただきました。これを委員長、副委員長、事務局で検討し、9の「新発田食循環大使」、10の「しばた食の循環大使」がよいのではないかとということで候補とした。良い名前、アイデアにとんだ名称を提案いただきました。その中で、新発田という地名や食という字句ははずせないのではということで候補を絞った。「新発田」という文字について、漢字が良いか、ひらがなが良いかを皆様におはかりしたい。または、他に提案があれば伺いたい。

【A委員】

参考に申し上げるが、私は陸上競技に関係している。男子は漢字で「新発田マラソン」、女子はひらがなで「しばたマラソン」としている。ひらがなは、優しげに聞こえるので使い分けている。

【B委員】

ひらがながよい。ひらがなの「しばた」の方がイメージが強いと思う。

【C委員】

全国的には読めない人も多いようだが、「新・発・田」がよいと思う。

【D委員】

NHKのアナウンサーも番組内で新発田を漢字で読まれている。せっくなので漢字表記がよいと思う。

【A委員】

しばたリレートークの名称はひらがなであるが、これにはどういう理由があるのか。

【委員長】

事務局、説明をお願いしたい。

【事務局】

食の循環の「循環」という漢字が硬いイメージがある。そこに新発田を漢字にすると堅苦しいという話があった。子どもからも参画して欲しいことからひらがなを使ったと記憶している。

【委員長】

新発田という漢字、循環という漢字、漢字だらけで堅苦しいということで「しばた」をひらがなにしたという経緯だそうです。

【E委員】

新発田の応援団は、県外をまわるのか、新発田を中心とするのか、それによって違うと思う。知ってもらうためには、「新発田」を売りたいので漢字。イメージ的な柔らかさを売るのであれば、ひらがながよい。但し、「食とみどりの新発田っ子プラン」では、「新発田」が漢字である。交錯している面もあるので、統一をはかる必要があるのではないか。

【委員長】

いろいろとご意見をいただきました。余談であるは、名刺を渡した際、東京の方々は新発田という漢字が読めない。ひらがなの方が、漢字の羅列が続くよりは、柔らかい感じがしてよいという気がしている。

【F委員】

食の循環という形で刷り物ができているのであれば整合性をとって新発田はひらがながよいと思うし、決まった経緯に立ち会ってきたことからひらがなを指示したい。

【委員長】

分かりました。皆さん、ここは「しばた」とひらがなでいった方が、柔らかそうでよいという気がしますがいかがでしょうか。多数決という方法もあるが、後々問題となっても困ります。ひらがなで異議ございませんでしょうか。

【各委員】

意見なし

【委員長】

ご異議無いということで、「しばた」をひらがなで決定させていただきます。

議事の順番が前後しますが関連します食の循環応援団の方ですが、25件の名称をいただいたが、委員長、副委員長、事務局で絞った中で、「新発田食の循環応援団」を候補とした。食と循環を入れた方がよい、また、サポーターではなく応援団がよいということで案とした。新発田を漢字か、ひらがなということになるが、大使との整合性からすれば「新発田」をひらがなということになるがご意見無いでしょうか。

【B委員】

統一した方がよいと思う。

【委員長】

他にご意見無いようであれば只今の2つの案件、大使を「しばた食の循環大使」、応援団を「しばた食の循環応援団」ということで新発田を「ひらがな」にすることに決定いたします。

大使の任命式を行わなければならないと考えている。永島敏行さんが大使ということであるが、非常に多忙な方と聞いている。そんな中、任命式をどのように考えているのか、事務局より案を説明願いたい。

【事務局】

前回の推進委員会で永島さんを大使の候補として調整することで了承いただいた。以降、6月25日付け文書にて、永島さんから大使を了承いただいたことをお知らせしてきた。

(以下、資料に基づき説明)

具体的な当日の内容については、別途、小さな委員会を設けて検討、企画、実施に当たってはいかがと提案させていただきます。

【委員長】

1年間、食の循環大使として、一生懸命に新発田の食の循環の広報活動をしていただくわけであり、任命書を郵送してお願いして終わりというわけには行かないと思います。10月17日しか空いていないのか。また、青空市場には必ず出ていると聞きますが、そちらで任命式とも考えるが、10月17日しかないのかということになるが、任命から1ヶ月以上もが経過している。この時は、新発田に来ていただけるのか。

【事務局】

10月17日は、新発田で交流ということで日程を空けていただいています。

【委員長】

10月17日には、新発田に来ていただけるということです。この日、別な方面で収穫イベントがあるようですが、どのような内容なのでしょうか。

【事務局】

今年春にオープンした米倉ふれあい農園でのオープンイベントが予定されているようですが、はっきりした内容は出来上がっていない状況です。

【委員長】

新発田へ永島さんがこられて、市役所で任命書を手渡して終わりでは、もったいない気がする。秋でもあるし、永島さんは農業に造詣が深い方でもあるし、収穫に関するイベントを併せて計画できたら良いのではないかと考えるが、ご意見いただきたい。

【各委員】

意見なし

【委員長】

秋の1日を利用して、永島さんに新発田の食の循環によるまちづくりを知っていただき、あちこちで話していただくことが必要と考え、そういう段取りで進めたいと考えます。では、どうするかということになるが、10月17日頃は稲刈りも終わっている状況である。そうしたことから、事前の打合せで、4~5人のメンバーで知恵を出し合って骨格を作り提案することにしたいかがでしょうか。皆さんの中から、立候補していただく方はいませんか。

【C委員】

時期的に、田んぼでの収穫は無理、野菜の収穫で何ができるか、食を意識するのであれば、もちつき大会などと合わせてイベントを行ってはいかがでしょうか。

【F委員】

永島さんは農業に造詣が深いことは理解できる。しかし、私たちの事業は食の循環であること、それぞれの立場の専門の方がメンバーとして参加していることから収穫や販売に特化することはないと思う。委員長が言われたように永島さんに食の循環を植え付けるという観点から考えてはいかがでしょうか。

【委員長】

大変、よい意見をいただきました。永島さんには「つなぎ」で農作業のイメージがある。食の循環を知ってもらうことも加味し、4~5人のメンバーで検討いただきたく、事務局の腹案を発表させていただきたい。

【事務局】

出村委員、林委員、津村委員、星野委員、中野委員にお願いし、後日検討いただきたいと考えますが、いかがでしょうか。

【各委員】

異議なし

【委員長】

承認の拍手をお願いしたい。

【各委員】

(拍手で了承)

【委員長】

後日、メンバーの方にお集まりいただき検討をお願いいたします。

次に応援団制度についてですが、名称については先ほど、「しばた食の循環応援団」ということで承認いただきました。では応援団のメンバーについて、事務局より説明いただきたい。

【事務局】

(資料に基づき説明)

【委員長】

応援団の候補者案の12名の方については、まだ了解が取れていないということですね。今後お願いしていくこととなるが、この他に、食に造詣の深い新発田出身者を思いついた場合は事務局にお知らせいただきたい。また、事務局に対しては依頼の際に、食の循環の考え、取組をしっかりと伝えていただきたい。今後、12名の方をお願いしていくことでよろしいでしょうか。

【各委員】

異議なし

【E委員】

事業内容で、応援団のメッセージをホームページのみで紹介ということだが、どれだけの人が、ホームページを見るのか疑問である。また市報やリレートーク会場に張り出すとか何か配慮いただきたい。

【委員長】

ご意見のとおりだと思います。春に食の循環の専用ホームページが開設されたが、これまでのアクセス数はどのくらいか。事務局から説明いただきたい。

【事務局】

5月末に開設以降現在までのアクセス数は把握していない。把握し次第、何らかの形でお知らせしたい。

【委員長】

まだまだ、ホームページの普及は不十分である。よって、広報等を活用し、応援団員のメッセージ等を情報発信していくことでお願いしたい。

次に、リレートークについては、当委員会主催の第2回及び第4回で前回決定しています。内容について事務局より説明いただきたい。

【事務局】

(資料に基づき説明)

【委員長】

2回目、福岡伸一先生、4回目が田中優子先生ということであるが、委員の皆様からの参加をお願いしたい。また、10月8日の第2回開催は食と職のおまつりイベントも同時開催なのでしょうか。

【事務局】

前委員会の事業計画の中で、市の主催事業との連携で実施を予定していく旨を報告していたが、市事業が現在調整中であるため、未定となっている。福岡先生については、今年度、「しばたのおかず」という伝承料理本が発刊予定であることから、その辺に焦点を当てて話していただくことで依頼している。

【委員長】

「しばたのおかず」は10月8日の第2回リレートークに、発刊は間に合うのか。

【事務局】

7月下旬発刊とお知らせしたが、発刊元に確認の結果、9月下旬を目指し作業中とのことでした。

【委員長】

2ヶ月程度遅れるとのことであるが、第2回リレートークには間に合うということですね。

【事務局】

委員の皆様からリレートーク開催ポスターの掲示、チラシの配布に出来る限りの協力をお願いしたい。

【委員長】

食の循環しばたモットイナイ運動については、前回の委員会で提案され、皆さんからも運動の展開についてアンケートに協力いただきました。その集計結果がでています。しかし、このモットイナイ運動は、簡単に答えの出るものではないと考えます。モットイナイ運動がどうあるべきか、どのような方向性に行くべきなのかをグループ討議で出してもらおうほうがよいのではないかとということで事前打合せしました。そのことについて、事務局より説明をお願いします。

【事務局】

(資料に基づき説明)

【委員長】

モットイナイ運動の考え方について、一人ひとりの意見を出していただくことがねらいです。それでは、班編成はどうしますか。

【事務局】

お配りした名簿にそって、班ごとに分かれて討議をお願いします。

(以降、班に分かれてのグループワークを実施。討議内容は別途記載。)

【委員長】

お疲れ様でした。短時間ではありましたが、有意義な話し合いができたのではないかと思います。それでは、各グループからの発表をお願いします。

各グループ発表

1 班発表内容

モットイナイ運動は、まずは教育でしょうということです。保育園、幼稚園、小学校の頃からモットイナイという意味を間違いなく教えていくべきです。子どもが大人になったときに素直にモットイナイという心から言葉が発せられるようになればよいということで話し合いがされました。これまで私たちも浪費は認めたと心つき思っているなかで、もう一度考え方を考えるには教育しかないだろうということです。常に推進委員会や市から市民に対して、広報やポスター等でモットイナイを継続して啓発していくべきだろうということです。この2本立の取組で、じわじわと効果が出てくるということが話し合われました。

2 班発表内容

2班でも、教育が重要ではないかということで話し合われました。無理に子どもにモットイナイを言わせるのではなく、子どもが家庭でモットイナイを自然と発することができるような施策ができれば、運動が広がるのではないかとということでした。この委員会の参集メンバーは各自がプロフェッショナルではあるが、相手に対する理解はあまり高くないと思います。食の循環の関わりの中で集まっており、互いを理

解することで、モッタイナイ運動が際立っていくのではないかとの意見も出されました。

私の意見ですが、施策としてモッタイナイ運動の現場を回るなど、子どもを含め市民を対象とした循環バス研修会を計画してはどうかということです。啓発する上で注意が必要なこともあります。例えば塩分摂取過多や糖尿病の話もあり、モッタイナイから残さないのではなく、健康の観点から残さなければならぬ現状も考慮し、バランスよく取組まないと悪影響を及ぼすおそれもあるとの意見もありました。飲食店等の協力店登録制度で 100 件を目標にめりはりのある施策を行う必要が大切であるという意見と、事業所における食品ロスの問題もあるがまずは家庭から発信することが大切であるとの意見でした。

3 班発表内容

様々な意見が出されましたが、まとめとして新発田でモッタイナイ運動に力を入れアピールしていくには、家庭からそれぞれの立場で小さい頃から始めていくことで運動が大きくなっていくと考えることから、小さい頃から始めましょうということでした。

【委員長】

最後のまとめをします。皆様の話聞いて見ますと、子どものときからの教育が重要であると思いました。そして、長い期間で取り組むこと、それだけではなくおおいに市民に啓発していくためにポスターやイベントを行っていくことも大切であるとの話が多かったと思います。

最後に、塚野部長よりご意見、感想がありましたらお聞かせ願いたいと思います。

【塚野部長】

食の循環に取り組むに当たりまして、条文の前文の中に「かつてはそこで作物を育て、それを食べ、残ったものは土に還すという食の循環が形成され、人々は大地を大切にする行為を通じて生きるのに必要な人間性を育んできた。それが今、壊れています。」と謳われています。推進計画の市長あいさつの中でも「食べる喜び、恵への感謝、自然との調和、生命の尊さなど多くを学び、それにより豊かな人間性を育んでいくことが大切であると考えております。」との言葉がありました。ある面でモッタイナイ運動は、「ごみを減らしましょう。環境への付加を少しでも小さくしましょう。」という環境問題として捉える側面がありますが、私たちの食の循環の取組は、人間性を育てていく取組でもあるということをご各班の皆様から教育、啓発、子どもの頃からということを感じております。経営学者のドラッカーの言葉に「小さな成功でも続けることはできる。続くことによって積み上げること、それによって成果は生まれる。」ということで、この運動は、非常に長い取組で、時間がかかり、2 や 3 年で結果がでるものではないといっておられたが、簡単なようであるが粘り強い取組をしていかなければ成功していかない。互いの問題も出たでしょうし、やってやろうという気持ちも起こったかもしれませんが、ここを出発点にしてモッタイナイ運動を大きく取り上げてもらい、食の循環による取組を一回りも二回りも大きくできるのではないかと感じました。

【委員長】

ありがとうございました。今回の委員会の内容は、まとめて皆さんに再度お渡ししますので、ご確認いただきたいと思います。その他の事項について、事務局お願いいたします。

【事務局】

次回委員会開催は、11 月から 12 月かけての開催を予定しています。また、委員会に対する意見、感想を 8 月 24 日(火)までに別紙にてお願いします。また、8 月 22 日(日)に永島敏行さんも来られての「いがた青空市場」が開催されます。

【委員長】

委員会への意見、感想について、本日の進め方がよかったか、今後の委員会のあり方等、何での結構ですでお寄せいただきたいと思います。以上を持ちまして、閉会といたします。お疲れ様でした。

グループワーク記録

1班 検討内容

高山委員、中野(藤)委員、林委員、宮崎委員、佐藤(恭)委員、津村委員、下條委員長

【事務局】

モッタイナイ運動をどう盛り上げるかを皆さんに論議いただきたい。

初めに前委員会の後に、委員の皆さんからモッタイナイ運動について、できることや課題等を書面でご意見いただいているが、自己紹介も兼ねてその内容をご紹介いただきたい。G委員からお願いします。

【G委員】

米倉の有機の里交流施設運営協議会の立場で参加している。会としてできることは、農業体験イベントの開催を通して、自然や循環への関心を高めて、命をいただくことを体感してもらい、モッタイナイの意識をも高めていくことができると考えている。

【事務局】

モッタイナイ運動に対する課題についてはいかがでしょうか。

【G委員】

会としての課題になるが、イベント開催に係るスタッフの専門知識が不足していて、それが課題です。

【事務局】

続いてC委員をお願いします。

【C委員】

保健自治会の会長の立場で参加している。会としての話し合いができていないので、先般の書面意見については個人的な意見を出させていただいた。

【H委員】

NPOで活動を進めている。平成18年頃からモッタイナイ運動ではないが、食の大切さと食をいかに循環させるか等の色々な課題を先取りして、教育委員会などと協力し、小中学校で「給食を残してはいけない」、「残したらどうするか」ということを指導しながら、給食残渣リサイクルを進めている。また、市内11自治会で生ごみリサイクル運動に取り組んでいる。今年度は土地を借りて、生ごみ混入堆肥使った作物の栽培にも取り組んでいる。大根菜、ゴーヤ、枝豆、かぼちゃなどを栽培している。次にはサツマイモも栽培しているので、ぜひ子ども達にも、自分達にもリサイクルができていてほしいと感じてもらいたいと思っている。

【事務局】

委員をお願いします。

【I委員】

実際にやっていることの紹介になるが、学校給食のサイクル推進事業を進めていて、もったいないという精神にのっとった取組を行っている。学校給食を残さず食べる、やむ得ず残った場合は焼却せずに堆肥にして循環させていこうというものです。平成17年から始め、平成21年度には34校中11校、今年度4校が加わり15校になる予定です。余ったものをすてるのではなく、子ども達が自分の残したものを水切り分別して、堆肥にするための準備をする。また、なぜそういう取組をするのかを、学校、NPOと協力して子ども達に伝えている。また、食育を家庭に波及させるため、学校を通じて周知啓発している。

【事務局】

続いて、J委員をお願いします。

【J委員】

めざせ100彩健康づくり推進実行委員会の代表として参加している。

モットイナイ運動でできることについて、個人の見解ではあるが自らの割烹経営という職業柄、難しい問題だと感じているのが正直なところです。管轄官庁等の指導を無視して営業ができない。もったいないという気持ちは分からなくないが、使い回しをしまえば営業ができなくなってしまいます。食堂と違い、お客様と対面していないので、半分や少量の提供も難しい。そうしたことから、今のところできることとしてはポスター等での告知関係になる。

【事務局】

続いて、K 委員をお願いします。

【K 委員】

私立幼稚園協議会を代表しているが、保護者であるので一市民としての立場の方が近いと思っている。

個人の意見であるが、園でというよりは家庭でモットイナイについて子ども達に話しかけていくことが大事だと思っている。

【事務局】

L 委員をお願いします。

【L 委員】

市民として参加している。モットイナイ運動については、各家庭で「もったいない」という言葉すら死語になりつつある。この言葉を復活させたいと思っている。取り組むには家庭が一番簡単なのではと感じている。高山委員のお話にもあったが、料亭でというよりは、まずは家でと思っている。「もったいない」は恥ずかしいことではないことを、子どもに教えることが大切。また、当然ゴミはでるもの。昔、コンポストがはやって、最近は見なくなっている。これを復活させてもよいと思う。

【事務局】

ありがとうございます。これまで皆様からモットイナイ運動でできることや課題についてお話いただいたが、先般の委員の意見を集約すると「モットイナイ運動をいかに盛り上げるか」ということが、一番の課題であろうということになった。これを本日のテーマとして皆さんに論議いただきたい。

グループの発表が予定されているが、いかがいたしましょう。

【C 委員】

L 委員をお願いしたい。

【各委員】

異議なし。

【事務局】

異議なしとのことなので、L 委員をお願いします。

それでは、本日、新発田市や全国のゴミの状況等について簡単にご説明させていただいたが、その辺を含めて「食の循環モットイナイ運動」を盛り上げるには、どういった手法があるのか等についてフリーに意見交換をお願いします。

【C 委員】

子どもの頃から平行して進めなければ、なかなかできない。また、個人の家庭ではできるが、高山委員のお話のとおり料亭などになると難しい。料亭と食堂では少し違うが、例えば店屋物などでは、少量盛りなどを願うするなどはできるのではないか。

【事務局】

今ほど子どもの頃からの働きかけという意見がでましたが、日頃 NPO で子ども達のもったいない意識を高めようということで、活動されている佐藤委員にご意見をお願いしたい。新発田でモットイナイ運動を進めるにあたり、「子ども」という着眼点もあると思うが、日頃の活動を通してお気づきの点があれば、ご紹介いただきたい。

【 委員】

最初は大人を対象に取組み始めたが、大人となると失礼ながらその場限りで持続性がなかった。そこで子どもからということになり、食の大切さと作ってくれる人への感謝を学んでほしいために、教育委員会にお願いした。最近のことだが、小学校では漠然と取り組んでいるという感があるが、中学校に講演に行った時、生徒の代表が「小学校の時にも給食残渣処理をやったが、そんなに大切なことと思わなかったが、今、自分達のやっていることがすごいことだと思った。きちんと理解して取り組まなければいけないだね。」と話していたことが、とても印象深く有難い。子ども達には、食の大切さを学んでもらうことが、私の運動の一つだと思う。また、色々な町内会からも声がかかり、食の循環や食の大切さについて講演に行っているが、コンポストの使用などについて色々提案があるので市に伝えていきたい。また、有機資源センターの堆肥を使用している農家から食材を仕入れて、年4回エコッキングを開催し、新発田の食材の良さや、いかに使い切るかを学んでもらっている。料理教室の参加者はそのあたりを理解してくれていると思う。底辺の広がり大切だと思う。学校の先生方もよく勉強してくれていて、有難く思っている。

また、幹事を務めて飲食店を利用することもあるが、その際には食べきれる量を注文し、足りなければ追加するなど、自分達が納得した量であれば食べ残すこともないので、そうした点で食べ切りを心掛けている。

【事務局】

では、就学前の子どもに関わる観点からK委員いかがでしょうか。

【K委員】

モットイナイ運動を盛り上げるには、まずポスター、告知なりを活用することは大切。日頃、意識的に努めていないと「少しならいいのでは」という感じなる。家庭でも取組を進めましょうということ、幼稚園、保育園を通じて家庭へ伝えなければならない。残したもったいないという気持ちはみんなもっていると思うが、それを口に出して言えたり、周りが盛り上がっていれば、恥ずかしいという気持ちもなくなると思う。

【事務局】

全体でモットイナイ意識を共有して、ごく普通のことと感じられるようにということですね。

では、G委員は農業をされているということで、生産サイドからもったいない意識を培うとか、運動を盛り上げるとか個人の意見でも結構ですので、お聞かせください。

【G委員】

専業農家で農業の観点からイベントなどにも関わっている。農業士として、子ども対象の農業体験イベントを行ったことがあるが、子どもから「こんな思いをして食品を作っているの、今後残さないようにしたい。」という返答がよく返ってくる。その時はそう思っても、なかなか続かない。そこで、指導する言葉として、「学校の給食も栄養士さんが色々考えて作っているメニューなんだ。残すことはもったいない。なぜもったいないかと言えば、将来イチローになれる可能性があるかもしれないのに、ピーマンを食べられなかっただけでなれないかもしれない。野菜を食べることで綺麗になってアイドルになれる可能性もあるかもしれない。」など、子どもがもったいないと思えるような伝え方をしている。

また、農協の青年部にも所属していて宴会の席で、食を作っている立場で残すことは良くないので、始まる時に「乾杯」ではなく「いただきます」と言い、最初の10分間は立たずにまず食べ、最後に一口食べて「ごちそうさま」といって終わるようにしている。

【事務局】

これまでのご意見には共通点があって、「もったいない」の意識付けや振り返る機会が必要だということです。意識付けや忘れがちな「もったいない」という気持ちを振り返るなど、例えばそうした機会を飲食店の立場で設けることができるのなどについて、J委員からお話いただきたい。

先ほど、保健所の絡みもあり掲示物による啓発に限られてくるとのお話もあったが、呼びかけるサイドとしていかがでしょうか。

【J委員】

自分の業界はご飯を食べに来るところではなく、お酒を飲みに来るところ。基本的にお酒を飲んでしまうと、お話してもなかなか聞いていただけないと思う。従業員が宴会場に入るたびに、もったいないを呼びかけることも難しい。不特定多数の人がいて、好き嫌いある中で、みんな食べてくれというのも難しい。

【事務局】

できるだけ食べきっていただくよう、可能な範囲での啓発ということになりますでしょうか。

【J委員】

そうしたことは、基本的には躰の範囲のこと。盛り上げるためには裾野から広げていかなければ。私たちも高度経済期以降の飽食の時代に育っていて、段々「もったいない」という意識が薄れている。また、核家族化が進み、年寄と住んでいないから「米には七人の神さまが入っているから残さず食べなさい。」といった言い伝えも知らない。そういったところから始めないと広がらない。だから、こういう取組をするのなら10年スパンで考えないと。取り組んだから3年後に結果がでるかといったら、そうではない。意識付けはできるかもしれないが、結局数字だけを見ると「何だ。これだけ捨ててるじゃないか。」ということになって本末転倒になるので、非常に難しいことだと感じている。消費期限と賞味期限の違いも一般の人はわからない。それらも含め、皆さんに啓発しなければ。そのために何かを仕掛けなければならない。その仕掛けが何なのかとなれば、なかなか思いつかない。

【事務局】

幼少期には「意識付け」、大人になってからは「振り返り」の機会をいかに重要なのかなという感じを受けます。例えば、先ほど紹介した福井県の「食べきり運動」や、その他にも「食育の日」などもあるが、「この日は何の日」のような振り返りの機会があると、普段忘れていたことも思い出せるのかなという感もあります。その辺りも含めて皆さんいかがでしょうか。委員いかがでしょう。

【委員】

市民運動にしないと盛り上がらない。それぞれの立場がネックになることもある。宴会などでも市長から「まず食べなさい」との話がある。そうした啓発が重要。あとはやはり教育が重要。条例や計画を作る前にまず何かをやらなければということから、教育から取り組んできた。大人より子どもから変えていこうという発想から入った。地道な運動を継続的にやっていくことが大切。

【事務局】

皆さんからご意見をいただいたが、下條委員長が発表を担当くださるとのことから、まとめの意見として何かございますでしょうか。

【L委員】

やはり教育、子どもの頃からなんだろうと思う。それは1、2年の問題ではなく、今の子ども達が大人になって「もったいない」ということを平気で言える大人になるよう教育していくこと。そして、様々な方面で新発田の取組を知らせ、イベント的なもので働きかけていけばよいということで発表してはどうか。

【事務局】

いかがでしょうか。子どもの頃からの教育と、新発田の取組を継続的に告知していくということですが。

【各委員】

了承

2班 検討内容

渡辺(栄)委員、西委員、市野瀬委員、中野(柳)委員、相馬委員、渡辺(兼)委員、茂野委員、星野委員

【事務局】

第1回委員会以降、各委員から「モッタイナイ運動」を進める中でできること、または課題と考えられることをご意見いただきました。それらの内容を含め、9月から市内の飲食店等で「モッタイナイ運動」協力店登録制度をスタートさせていくが、いかに運動に関わり、どのように運動展開を図れば、市内での盛り上がりが見られるかについて、ご意見いただきますようお願いいたします。

【E委員】

小学校では「食とみどりの新発田っ子プラン」を推進し取り組んでおり、新たに追加しての取組は趣旨が違ふと思う。子どもたちは食のみどりの新発田っ子を通じて「もったいない」を発している。

【M委員】

「モッタイナイ運動」は難しいことではない。家庭からできる小さなことから始めていこうと思う。幼稚園では絵本を通じ、小さな子へ言葉で伝えられる。言葉の内容については、家庭での関わりが必要であり、子どもが変われば家庭も変わると考える。

【N委員】

事業者として、環境、調理、生ごみ、省エネの取組を通して、子どもたちに発信している。それぞれの立場ごとで取組は違ふと思う。

【A委員】

「モッタイナイ運動」を進める中で、残さず食べるということは一方で塩分や糖分等の取り過ぎという一面もある。食のバランスが大切である。

【F委員】

「モッタイナイ運動」はバーチャルウォーター（仮想水）の話等を含めながら子どもの頃から教えていく必要がある。それが、教育である。

【O委員】

市の事業においても家庭での取組、食育推進、野菜の必要量の摂取を進めているが、難しさを感じる。

【P委員】

食品製造業の立場からは、食品ロスの問題が現実としてある。

【Q委員】

市内において、堆肥化推進地区の取組を進める中、家庭から生ごみを出さないことや家庭での食の循環の普及を推進する必要がある。食に関わる現状を市民の心に訴えるため、まずはPRを先行して各家庭への普及を図る必要がある。なんで、新発田が「もったいない」なのかを市民に訴えることから始める必要がある。

【F委員】

もったいないを極端に追い求めると食べ残しの使い回しにもなりかねない。まずは、家庭からスタートすべきと考える。

【N委員】

この推進委員会の各委員さんは、それぞれの立場の取組には明るいが、食の循環全体では、なかなか見えてこない部分もあると思う。例えば、食の循環の体験バスを走らせ、皆で学習してはいかがか。

【F委員】

私も研修会等の受入れを行っているが、大人だけでは質問が来ない。一方、子どもたちは多くの質問する。体験バス等は子どもの参加が必要である。

3班 検討内容

佐藤(三)委員、清野副委員長、出村満委員、伊藤ひろみ委員、原参事、増子係長

【B委員】

食生活改善推進委員の立場で参加。皆で小さいことから始めよう。例えば牛乳を買うときに、奥に置いてある日付の新しい物を手にする。そのような買い方を続けていると、手前の日付が古い牛乳は廃棄処分になる。そこで、なるべく手前の方から商品を手にとることや、買い過ぎない、作り過ぎないように心掛けようと食推委員としては確認をしている。

【R委員】

栄養士の立場で参加。栄養士はそれぞれの持ち場で「もったいない」の指導を行っているのでそれを継続したい。手薄になっているような高校生等にも指導を充実したい。また、モットイナイ運動を実施するに当たっては、飲食店、家庭、学校等それぞれでやるべきことがあるので、絞ってやっていった方が良いと思う。

【S委員】

小学校 PTA 会長の立場で参加。小学校での取組として、残渣処理や話をしないで食べることに集中する時間を設けるなど、食べ残しを減らそうと取組んでいる。子ども達からモットイナイという意識が出てくれば、親も意識が変わってくると思うので、小中学校から残すことは良くないという意識が強まれば良いと思う。課題として、給食の量や料理の工夫、外食残渣が多いので、その際に意識が高まれば良いと思う。

【T委員】

賞味期限や買い過ぎに留意することが大事。色んな立場でモットイナイの取組があるが、食事は誰もが行うので、その部分からどんな立場の方も関わりがある。普段の食事は市民が共通してモットイナイを考えていける。欲張って飲食店の人にはここを頑張ってもらいたいと思うと、商売の邪魔をするのではないかと思う。遠回りかもしれないが、まずは食事から。

【U委員(代理)】

この取組は、学校給食やゴミの問題、一般家庭生ごみの分別の徹底やその堆肥化も含め、関係者が一体となり進めることが大切。食べ残しという考え方が一番皆さんの耳には入りやすい。食べ残しを減らす、残すことはモットイナイということで、端的なキーワードで進めていけば大人も子どもも分かりやすい。しかし、実生活ではかなり難しい。話をしながら食べると残ってしまうので、食べる際にはきちんと食べることが大切と認識を新たにしている。

【V委員】

保育園の立場で参加。子ども達にどのように伝えていけば良いのかと考えた際に、モットイナイという言葉は親達は家であまり言っていない。例えば食べなくなったらいいよという感じている場面が多いと感じる。20年以上前は、モットイナイという言葉を使って食事の指導をすることがあったが、その言葉かけが押し付けというか食べにくくするというので、最近はモットイナイという言葉かけが少なくなった。そのため、子どもからモットイナイという言葉は少なくなった。

園としては、実際に食べながらモットイナイの意味も含めて伝えていかなければならないと思っている。保育園では年長児位になるとほとんど食べ残しがなくなる。お食事にお話はしているが、その子にあわせた盛り付けや食べるように薦めるなどの工夫をしている。だから、保育園では残渣はほとんどない。

園では給食のサンプルを飾っておくが、それを見て、嫌いな食べ物でも園では食べるけれども家や外食の際は食べないという声を聞く。ピーマンとか家では食べないものでも、園でとれたものは食べる。子どもと保育士が関わる中で保護者へも伝えていけるような取組ができる。

実生活では、買う際につい品物を奥の方から取ってしまうので、そういうことから気をつけたい。

【フリートーク】

【B委員】

今のお母さん達は、モットイという言葉を理解しているのでしょうか。

【U委員（代理）】

地域の子ども活動の中で、思っている以上に親達は子どもに向かってモットイナイという言葉を使っている。大人同士の飲み会等ではモットイナイという言葉は、ミバが悪いとかで使っていないが、子どもに対しては使っていると思ってみている。

【B委員】

食へに行った時にタッパーを使うということは、飲食店の責任や保健所の問題があるので、それが良いということでもない。難しいことかもしれない。3~4年はかかるよね。

【R委員】

飲食店では協力店として、のぼり旗が立つとかあるようですが、個々の家庭での取組をすすめるには、新発田市でキャンペーンをする等で、活動のアピールをしていかないと広まっていけないのではないかと。

【B委員】

食推では、これから栄養講習会を行う計画であるが、その際にモットイナイ運動の話をしていくことにしている。